

# FA11の山の先にある 「坂の上の雲」を目指して

特許庁技術懇話会 代表委員 川上 溢喜

## 巻・頭・言



平成の初めにバブル経済が崩壊して以来、日本の産業界はかつての勢いを失い、その後の好景気といわれた時期でさえ活気を実感できなくなっています。この間、日本が圧倒的に強かった液晶パネルや太陽電池などの世界シェアは大きく落ち込み、2009年にはこれまで世界のものづくりを支えてきた工作機械の生産額が世界3位に転落するなど翳りゆく日本を写すニュースが続いています。

日本では、こうした経済の状況に対応すべく、官民が「それぞれ」できる限りの努力を続けていますが、なかなか明るさが見えてこないのはなぜでしょうか。日本人のニーズに応えるという事情もあるかもしれませんが、日本の企業は同じ業界の中で同じような機能を持つ製品を作って過剰なまでの品質を競っており、国と企業が一体化している感すらあるアジアの大国の勢いに対峙できる余裕などないよう見られます。また、昨今、公務員の倫理問題が頻繁に報道されるようになり、官民一体といえは癒着といわれかねないこともあってか、必要以上に官民の連携が抑制されてきています。日本の携帯電話が、世界一の品質と機能を備えていながら、海外ではほとんど使われることなく日本市場で独自の進化を遂げ、世界標準からかけ離れてしまったことは、こうしたことと関係がないでしょうか。IMD国際競争力ランキングの総合順位は1992年に1位であったのが2009年は57カ国・地域中17位です。日本が得意とした「一丸となって」や「全員野球」の精神が忘れられて総合力が低下しているような気がしてなりません。

欧米と競争し、台頭するアジアの龍や虎と対峙していくには、日本の総合力を高める必要があり、そのためのキーワードは、「官民の連携」、「知的財産の活用」、「国際標準の獲得」の3つだと思っています。そして、そのいずれに

も必要なものが原動力となる人財です。特許庁には知的財産の実務だけではなく幅広い分野に長けた人財が集中していますが、長年苦しんできた審査順番待ち案件の処理もこれまでの着実な政策の実行とたゆまぬ努力で大きな山を越えつつあります。その滞貨の山の先にあるのは、こうした人財が、新たな官民の連携の姿を創出し、世界でもトップクラスの科学インフラ（IMD2位）と技術者の高い発明意欲を結びつけて知的財産の活用を促し、生み出された技術を国際標準に導くことではないでしょうか。

そこで、今年度は特技懇の目的である「会員相互の親睦と研さんならびに地位の向上をはかりあわせて特許行政に寄与し科学技術の振興をはかる」ことの一環として、「人財の交流」という観点から貢献できることは何かを考えてみたいと思います。すでにIP5に加えてカナダやロシアとも審査官の協議が始まりましたが、審査の実務面での交流だけではなく、審査官相互の文化面での交流を通じた人財のネットワーク作りも重要だと考えます。そうすれば、実務的交流と文化的交流との両面からの活動によって、日本の優れた審査実務を国際標準化することも今まで以上に容易になるかもしれません。また、このような交流を通じて欧米とアジアを結ぶ人財の架け橋としての役割を果たすことも考えられます。知的財産という観点からの審査官・弁理士・産業界の官民の連携のあり方についても、幅広い意見交換を通じて得られるものがあるかもしれません。

かつて日本が一つになって「坂の上の雲」を目指した明治の時代のように、特技懇らしい活動を通じて、FA11の山の先にある平成の時代の「坂の上の雲」を目指すことに貢献できれば幸いです。いずれにしても、人財の核を構成する会員のみなさまのご意見を伺いながら今年度の活動を有益なものとしていきたいと思っています。